今月の
選者

立花 肇（ゼファー株式会社）

科学技術情報と外国語

情報管理 54(7), 429-431, doi: 10.1241/johokanri.54.429 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.54.429>)

生物学・農学研究者として18年、科学技術情報専門家として30年が過ぎてしまいました。ここ15年ほどは文献や特許の翻訳に関わることも多く、翻訳に関連する本を読む機会が増えました。科学技術情報と外国語の関係について考えてみると、昔の人たちは英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語など、種々の外国語を学ぶ必要がありました。しかし今日では、ドイツもフランスも小学校から英語を教えています。最近アフリカ南部を訪れましたが、どこの国も英語を国語としていました。ですから私たちは英語だけをマスターすればよいのです。英日・日英翻訳について、いろいろ教えられた本も多くありますが、それらの中からぜひ皆さんに読んでいただきたい本をご紹介します。また、今回の東日本大震災を期に、科学技術のあり方を考え直す必要が出てきました。当然、科学技術情報のあり方、科学技術情報担当者のあり方についても、考えなければなりません。ここでは、比較的読みやすく、読んで飽きない本を3冊をご紹介します。

『越前敏弥の日本人なら必ず誤訳する英文』

越前敏弥

ディスカヴァー・トゥエンティワン

(ディスカヴァー携書), 2009年, 1,050円(税込)

著者の越前敏弥氏はあの『ダ・ヴィンチ・コード』の翻訳者として有名ですが、翻訳学校で長年教えたことがあり、日本人が誤訳に陥りやすい英文を収集

<http://www.d21.co.jp/products/isbn9784887596894>

して、本書にまとめたものです。全部で140の英文があり、その1つ1つを丁寧に読めば、誤訳率は確実に減少するでしょう。

日本人はなぜ誤訳をするのでしょうか。それは、日本語と英語の構造的な違い、文法の違いをきちんと理解していないためです。科学技術文献や解説書の誤訳について、上智大学教授だった別宮貞徳氏が多くの著書で、翻訳者の実名を挙げて指摘しているのは有名ですが、著名な科学者も結構誤訳をしています。だからといって、私たちが誤訳をしてもよいということにはなりません。

本書によると、誤訳を避けるためには英文を必ず左から右へと読み進むことだそうです。「何だ、当たり前じゃないか」と思われそうですが、左から右へときちんと読めば、何が省略されているのか、代名詞が何を指しているのかが、間違いなく読み取れる

といいます。このことは、日本語にするときには頭から順に訳せと言っているのではありません。頭から理解しなさいと言っているのであって、日本語にするときには正しい日本語、美しい日本語に書き換えればよいのです。

本書では、前半で日本人が誤訳しやすい英文を文法の項目別に配列し、比較的短い英文について正しい訳し方を示し、後半ではそれらが複雑に混在した、難易度の高い英文を示しています。筆者はこの本を頭からゆっくりと3回読みましたが、それで大体日本人が犯しやすい過ちを理解することができました。

『特許翻訳の基礎と応用—高品質の英文明細書にするために』 倉増一
講談社サイエンティフィク、
2006年、3,675円（税込）

<http://www.kspub.co.jp/book/detail/1556102.html>

海外に特許を出願するには、どうしても英語の明細書を書く必要があります。筆者は研究者の時代に多くの海外特許を出願しましたが、その英文は外注によるものでした。しかしそれでも、その英文が適切かどうかを判断しなければなりません。外注に出す特許部（知財部）の担当者ならなおさらです。しかし本書が出るまで、適切な教科書が見当たりませんでした。

著者の倉増一氏は筆者の古い友人でもあります、

日英特許翻訳の専門家として活躍し、青山学院大で技術翻訳を教えていた人です。長年の経験で得た多くのノウハウを蓄積して、ようやく本書にまとめました。本書には「高品質の英文明細書にするために」という副題が付いていますが、ご承知のように特許明細書というのは、法律文書であると同時に技術文書でもあるので、注意すべき点が多々あります。

私たち日本人がどんなに頭を絞っても、優れた英文明細書を考え出すことはできません。ではどうすればよいのかといえば、優れた英文明細書をそっくり真似ればよいのです。日本特許情報機構（JAPIO）がこの4月から、会員企業に限って英語と日本語の例文が対になったデータベースのサービスを開始しました。これも同じ考えで、日英翻訳では優れた英文をどうやって見つけ出すかが重要です。本書にはたくさんの例題が載せてあり、それらの英文を自分の翻訳したい日本語に適切に割り当てていくことにより、優れた英文を仕上げることができます。

実際に本書をテキストとして、筆者等は倉増一氏に講師をお願いし、勉強会を開きました。毎月1回で2年間続けて、かなり力はつきましたが、日英翻訳で1本立ちするまでにはなりません。日英翻訳というものの難しさを実感しました。

『遠き落日』 上下巻、渡辺淳一
角川書店（角川文庫）、1982年、483円（税込）

本書は世界的細菌学者である野口英世の生涯を描いた小説で、映画化もされたのでご存知の方も多いことでしょう。作者の渡辺淳一氏は筆者の高校の先輩に当たる方で、医師で小説家として有名です。これまでたくさんの野口英世の伝記がありますが、作者は日本とアメリカで膨大な資料を集め、小説家としての文才と医師としての事実を見つめる科学的な目で、人間野口英世を見事に表現しています。

筆者がなぜ渡辺淳一氏の描く野口英世の虜になったかといえば、第一に野口英世は情報専門家であり、

©角川書店

http://www.kadokawa.co.jp/bunko/bk_detail.php?pcd=199999130714

科学研究における情報の大切さをよく理解し、それを実践したことがあります。第二には語学の大切さを認識して、20歳代前半で英、独、仏語の文献を辞書なしで読むほどであり、英語の論文はネイティブより速い速度で書いたといわれています。そして第三に、これが最も重要ですが、情報と自分の勘に頼りすぎて、未知なる物への恐れを忘れたことにより、自らの命を落としたことです。

英世は医師登録試験に合格したのに、郷里に帰って開業する道を選ばず東京にとどまり、順天堂を経て北里研究所に勤務しました。しかしどこでも学閥が強く、学校を出ていない英世は臨床や動物実験をすることができず、他人の手伝いや情報管理の仕事をするだけでした。しかし英世は図書館の仕事や医事週報などの出版の仕事を通じて、情報の大切さを学びそれを生かして、新しい道を開拓してゆきます。膨大な文献を読破して、それらを翻訳したり総説を書いたり、レポートにまとめたりしています。

こうした英世の武器は語学でした。福島で中学に通う間に外国人に付いて英語とドイツ語を学び、東京に出て医師になるための予備校に通いながら、フランス人にフランス語を学んでいます。それに比べて今の医師はなんて楽なことでしょう。英語さえ知っていればインターネットでPubMedを検索でき、欲しい情報を入手できるのでから。

英世の研究方法は、これまでの経験と情報をフルに生かして、病原菌を突き止めることでした。今になってみるとその中に多くの過ちが見られます。最も大きいのはウイルスの存在に気がつかなかったことです。しかしそれは英世1人が悪いのではなく、当時の多くの学者もそうでした。

私たちが学ばなければならないのは、人類が知り得たことはほんのわずかであり、自然界にはまだまだ未知の謎が多く存在するという事実です。人間は謙虚な気持ちで自然界に対して教えを請わなければなりません。科学技術情報担当者も同じことで、情報が存在しない未知なる神秘に対して、敬虔な気持ちで新しい世界への探索法を、科学者に提示する義務があります。野口英世は正にそのことを、自らの命に代えて私たちに教えてくれたのです。

福島県出身の野口英世は、東北人の誇りだといわれています。大震災からの復興には、野口英世の持つ強烈なイメージとエネルギーが必要なのではないのでしょうか。

執筆者略歴

立花 肇 (たちばな はじめ)

1940年北海道利尻島生まれ。1963年北海道大学農学部卒、東洋高圧（現三井化学）入社、18年間農材研究所勤務。農業、医薬、環境保護の研究に従事。日本化学物質安全・情報センター（JETOC）に3年間勤務の後、1984年より三井化学技術情報センターにおいて情報活動を行う。1995年（株）湘南情報サービスを設立（三井化学の子会社）し、代表取締役社長に就任。2000年に同社はゼファー（株）と合併し、三井化学から独立。現在は同社の取締役会長。主に科学技術論文の翻訳・抄録作成を行っている。

2004～2009年：（社）情報科学技術協会会長

2003～2010年：実践女子大学・短期大学講師